

対葉花文について

栗田 美由紀

一 はじめに

対葉花文は、二枚の葉を向き合わせたような形、つまり対葉形をもつところに特徴がある花形で、中国では唐時代に、日本では奈良時代に盛んに行われた装飾文様の一つである。一つの対葉形に萼をつけて一つの横向きの花としたものや、一つの対葉形を一枚の花弁に見立てて団花文を形作ったものがあり、宝相華と言い表されることも多い。また花文以外にも対葉形を使った装飾は、縁飾りや蓮弁形など随所に見ることができ、この独特な形は当時さまざまに応用され、広く愛好されていたことが知られる。

「対葉花文」という言葉は、源豊宗氏が東大寺法華堂不空絹索観音像の光背文様を指して用いたのが最初とされる¹⁾。その後、川勝政太郎氏によって対葉花文の分類が試みられたが²⁾、文様の変遷や流行時期にまでは論及されなかった。また対葉花文の発生についても不明な点が多く、パルメット唐草の発展形ともグプタ式唐草を応用したものともいわれるほか、西方銀器の文様の影響とするなどさまざまな説がある。そこで本稿では、日本と中国の美術工芸作品にあらわされた、対葉花文およびこの風変わりな花文と深い関わりがあると思われる対葉形を含む文様を分類整理し、対葉花文の成立と展開の様相について考えて

みたいと思う。

二 作例の検討

以下、本文中では、切れ込みのある葉の半截形二つを切れ込みのある側を内側にして向き合わせ、互いの先が接するよう湾曲させた形を「対葉形」といい、この対葉形を主要な構成要素とする花文を「対葉花文」という。ここでとりあげるのは七〜八世紀を中心とした日本と中国の作例とし、対葉花文および対葉形を主要な構成要素とする文様を次のように分類して順次みていくことにしたい。

- I 唐草の中にあらわされたもの
- II 団花文
- III つなぎ文
- IV 独立文
- V 蓮弁装飾

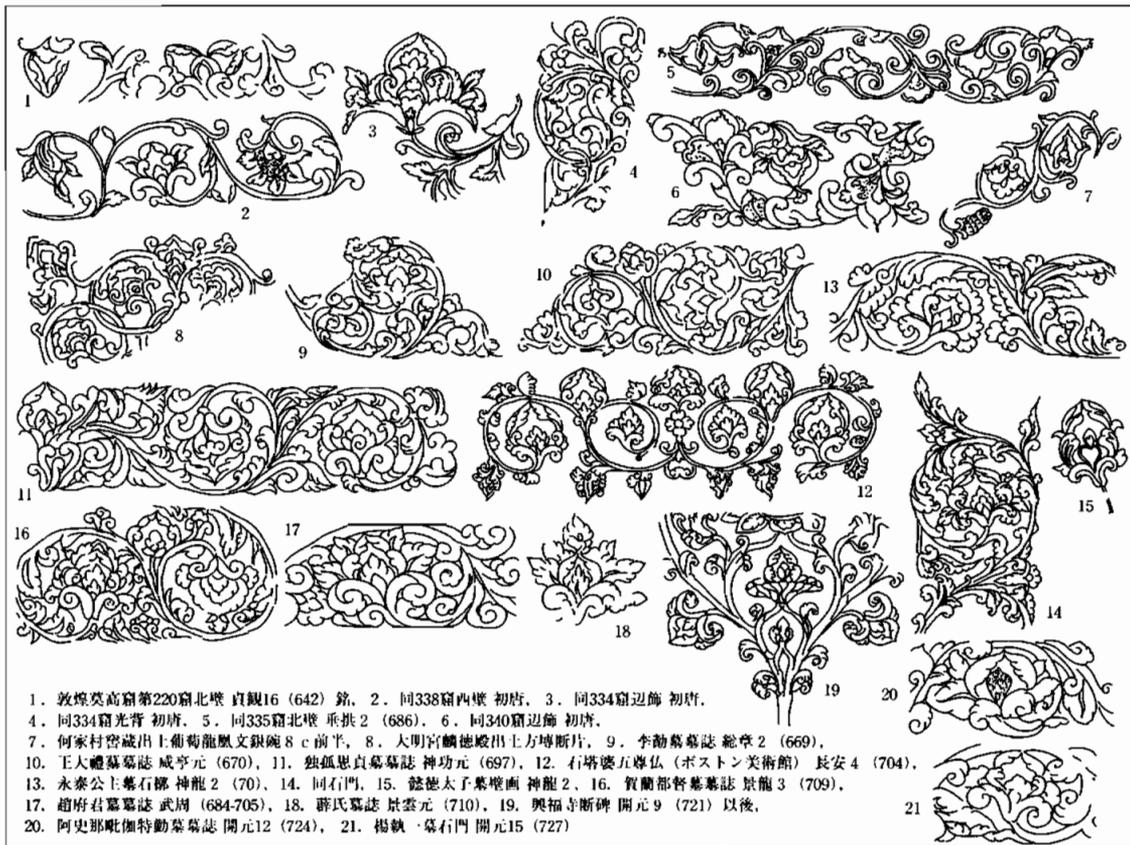
(二) 中国の作例

I 唐草の中にあらわされたもの

唐草の中にあらわされた対葉形・対葉花文の例は、敦煌莫高窟の藻井や天蓋の周縁、墓誌の装飾、金銀器などに多くある。これらは花や苞といった植物の一部として認識できるようなタイプ(A) (挿図1)と、唐草の起点や連結部に配置して文様としてのまとまりをつけたり、アクセントに使用するタイプ(B) (挿図2)に分けることができる。両者を比較すると、Aタイプは形が整い、七世紀半ば以降の作例に多いのに対し、Bタイプには形が定まらず、七世紀半ば頃かそれ以前と考えられる比較的早期の作品が含まれている。このことから唐草の中にあらわされたものとしては、唐草の起点や連結部に配置されるBタイプがより古様で、初期的な形態を示していると考えられる。またBタイプの中でも早い時期のものは西方起源の葡萄文様とともに描かれたり(挿図2・10・11・12)、巻込みの多い葉を主体とするグプタ式唐草の中にあらわされておられる(挿図2・1・2)、西方的な要素が強いという特徴がみられる。A・Bタイプともに最も形が整い、文様の中でも主要モチーフとして扱われるような例は、神龍二年(七〇六)の永泰公主墓石門の文様(挿図1・14)をはじめとする七世紀末から八世紀初頭までの作例に集中する。以後は形が粗略になったり、扱いが小さくなることから、唐草文の中に対葉形は七世紀中頃には成立し、以後、八世紀初頭にかけて最も盛行してその後衰退したと考えられる。

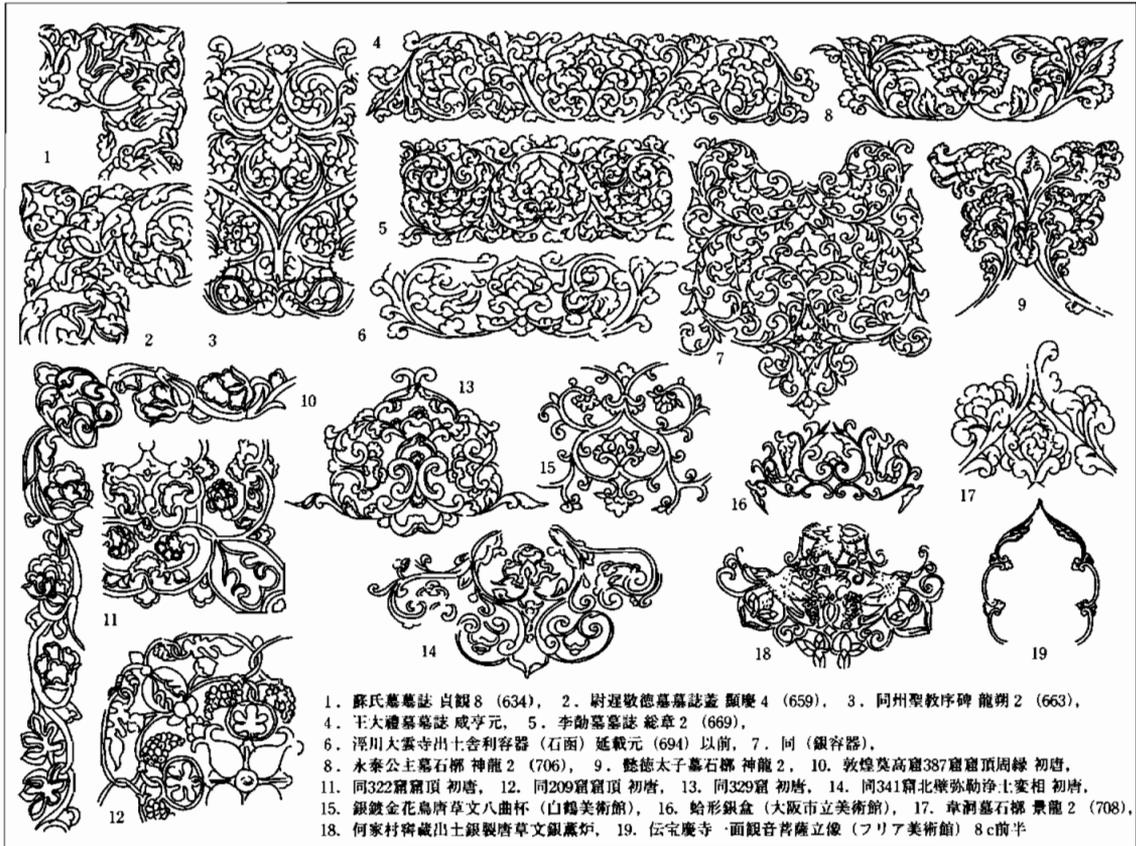
II 団花文(挿図3・4・5・6)

団花文の作例は敦煌莫高窟の藻井や頭光、墓誌装飾や金銀器、博などに多くある。早い時期の例には敦煌莫高窟の隋代の装飾文様(挿図3・1)や初唐早期と考えられる藻井文様(挿図3・2・3)があり、これらはやや幅広の対葉形の花弁をもつ四弁花として描かれている。これらの花弁は単色で暈網彩色は

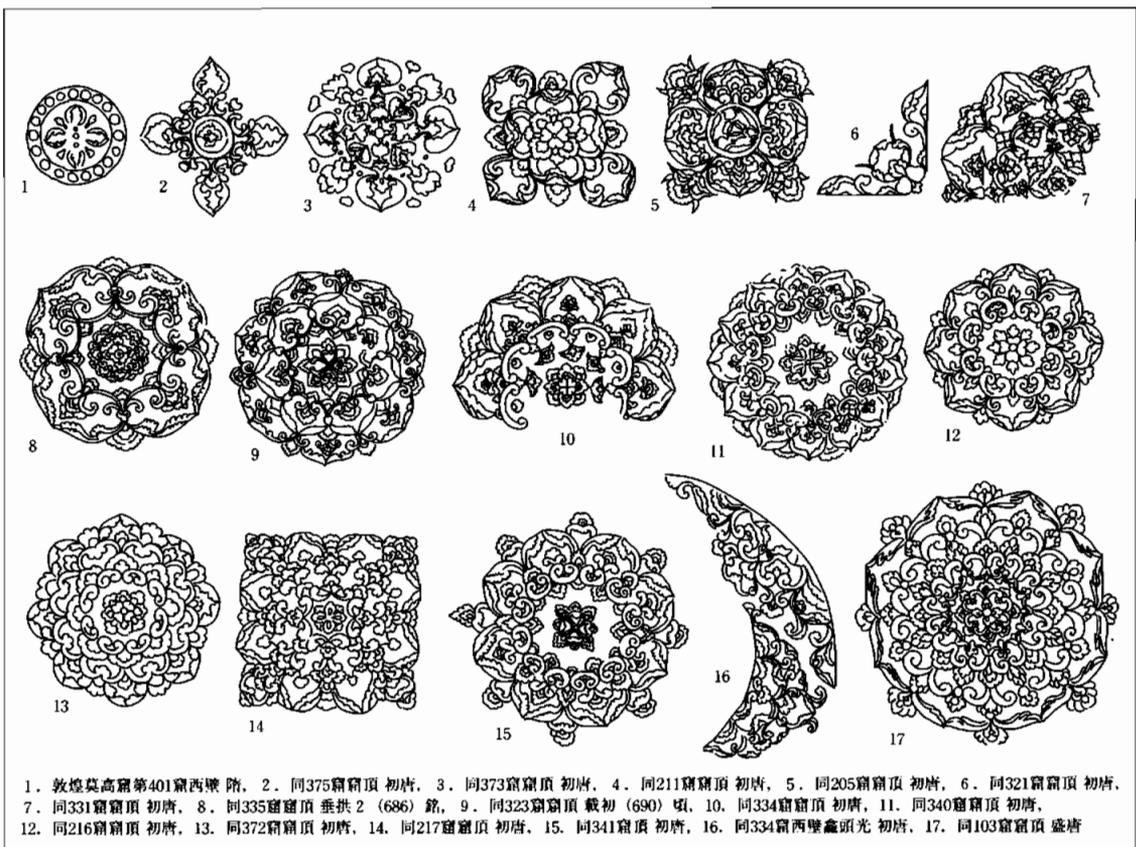


1. 敦煌莫高窟第220窟北壁 貞觀16 (642) 銘, 2. 同338窟西壁 初唐, 3. 同334窟邊飾 初唐,
4. 同334窟光背 初唐, 5. 同335窟北壁 垂拱2 (686), 6. 同340窟邊飾 初唐,
7. 何家村窖藏出土葡萄龍鳳文銀碗8c前半, 8. 大明宮麟德殿出土方磚斷片, 9. 李勣墓誌 總章2 (669),
10. 王大禮墓誌 咸亨元 (670), 11. 獨孤思貞墓誌 神功元 (697), 12. 石塔婆五尊像 (ボストン美術館) 長安4 (704),
13. 永泰公主墓石門 神龍2 (70), 14. 同石門, 15. 懿德太子墓壁面 神龍2, 16. 賀蘭郡督墓誌 景龍3 (709),
17. 趙府君墓誌 武周 (684-705), 18. 薛氏墓誌 景雲元 (710), 19. 興福寺斷碑 開元9 (721) 以後,
20. 阿史那毗伽特勒慕婁誌 開元12 (724), 21. 楊執一墓石門 開元15 (727)

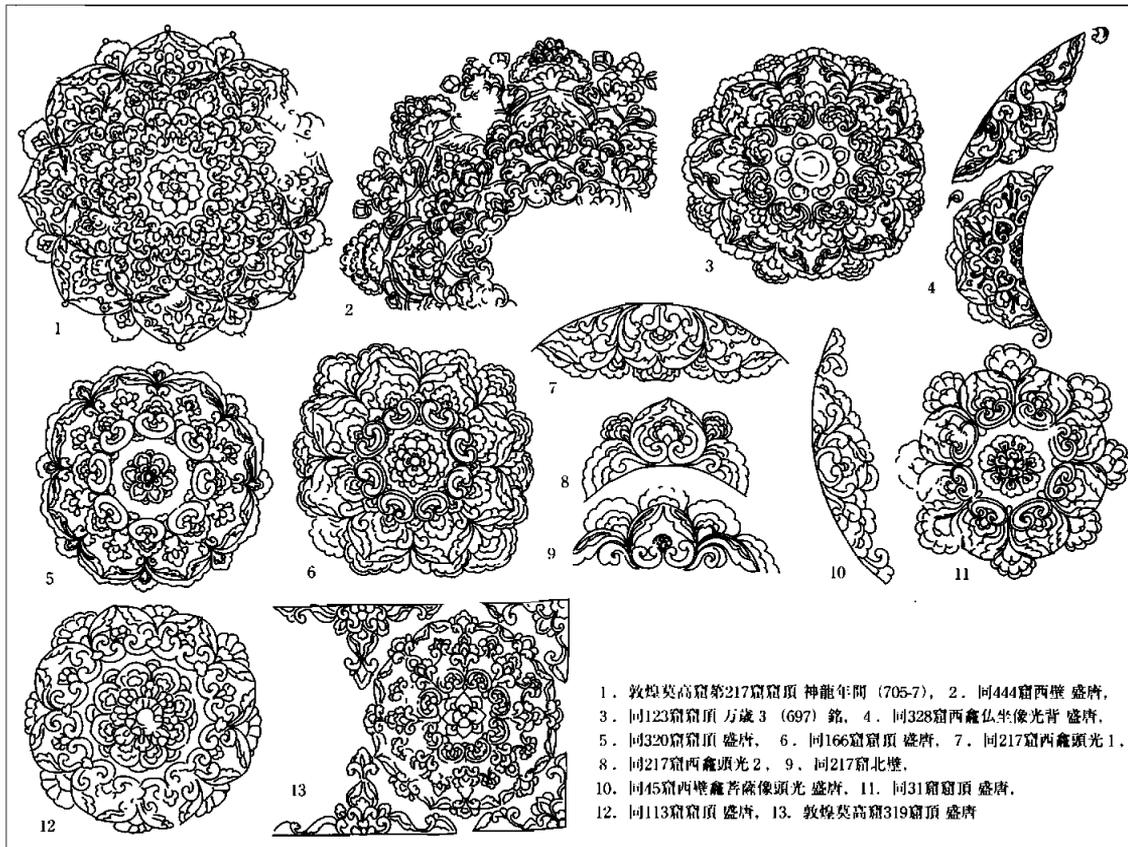
挿図1



挿図2

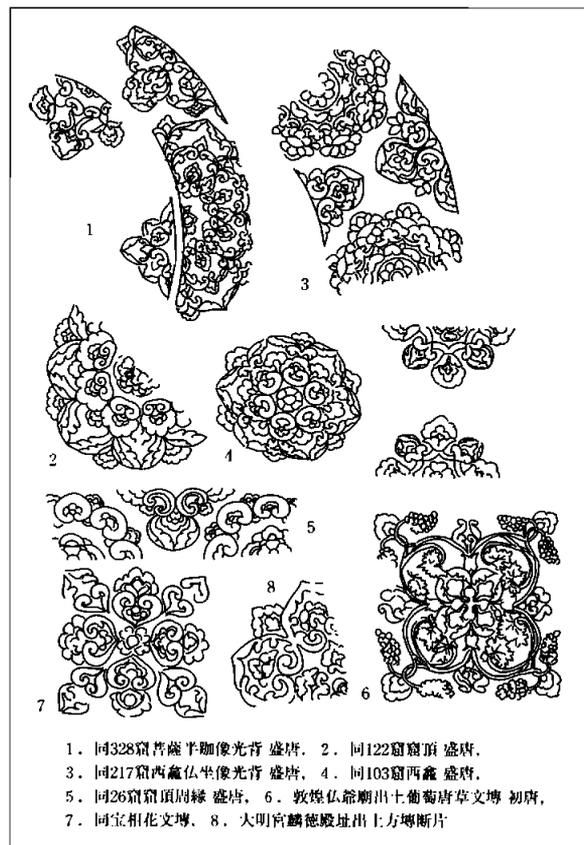


挿図3



1. 敦煌莫高窟第217窟窟頂 神龍年間 (705-7), 2. 同444窟西壁 盛唐,
3. 同123窟窟頂 方歲3 (697) 銘, 4. 同328窟西龕仏坐像光背 盛唐,
5. 同320窟窟頂 盛唐, 6. 同166窟窟頂 盛唐, 7. 同217窟西龕頭光 1,
8. 同217窟西龕頭光 2, 9. 同217窟北壁,
10. 同45窟西壁龕菩薩像頭光 盛唐, 11. 同31窟窟頂 盛唐,
12. 同113窟窟頂 盛唐, 13. 敦煌莫高窟319窟頂 盛唐

挿図 4



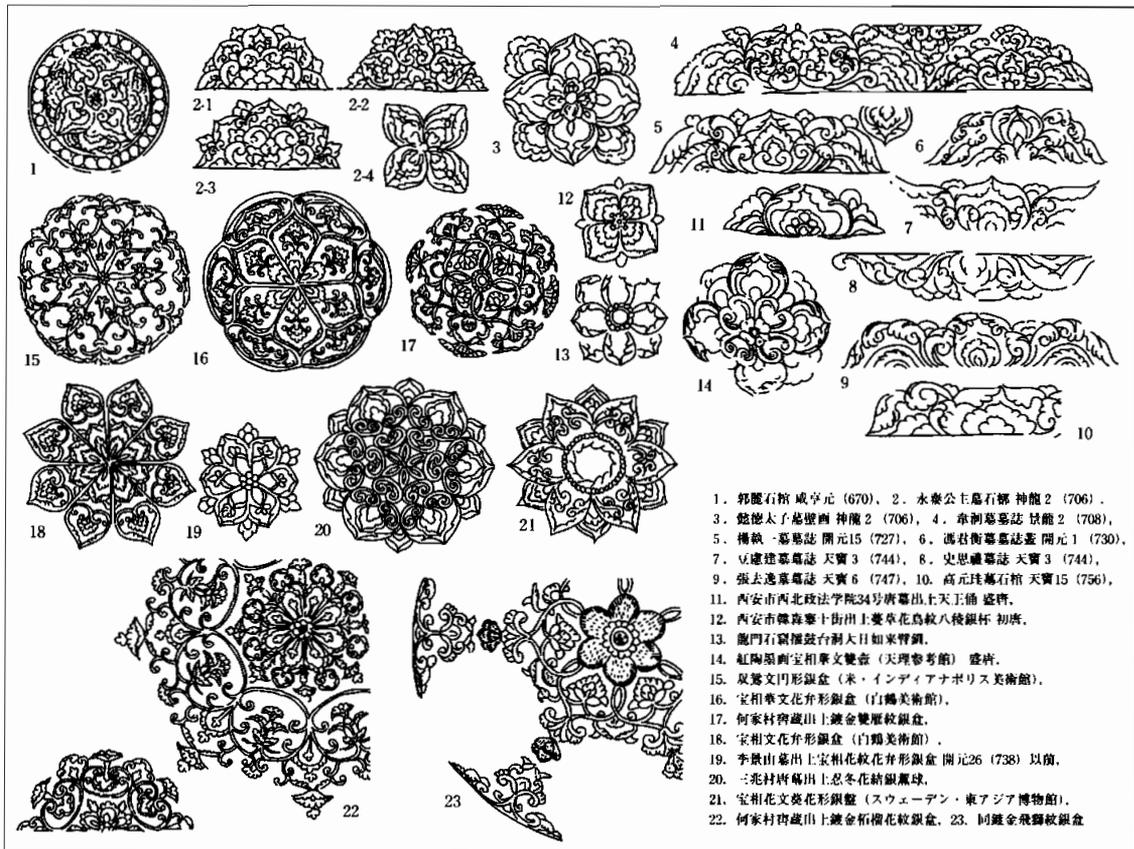
1. 同328窟菩薩半跏像光背 盛唐, 2. 同122窟窟頂 盛唐,
3. 同217窟西龕仏坐像光背 盛唐, 4. 同103窟西龕 盛唐,
5. 同26窟窟頂周縁 盛唐, 6. 敦煌仏館廟出土葡萄唐草文磚 初唐,
7. 同宝相花文磚, 8. 大明宮麟德殿址出土方磚斷片

挿図 5

施されていない。その後、幾重にも花卉を重ね、暈綉彩色で彩られた多弁の団花文があらわれ、頭光や墓誌の周縁装飾として団花文を半截した視花文も多く使われるようになる。八世紀初頭の作品に複雑で華麗な花文が多く、八世紀半ば以降にはあまりみられなくなることから、対葉形を花卉に用いた団花文は中国では七世紀前半に出現、七世紀半ばから八世紀前半にかけて流行し、以後は衰退したものと考えられる。

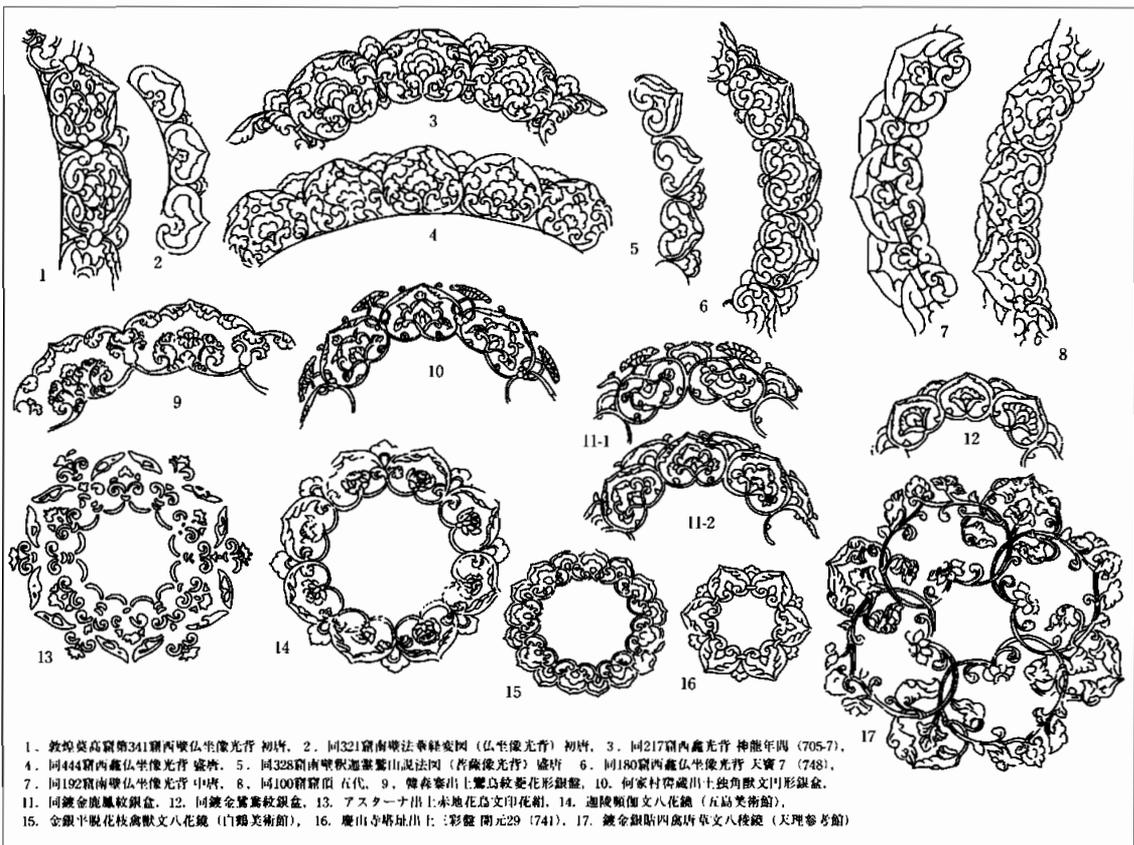
Ⅲ つなぎ文 (挿図 7)

つなぎ文は対葉形を横に連続させたもので、敦煌莫高窟の壁画の仏像の光背部分や金銀器の装飾に例がある。光背の装飾以外では内部に鳥獣をあらわすことが多い。敦煌莫高窟では初唐から五代に至るまでの作例が確認でき、金銀器では八世紀前半に作例が集中する。団花文の花卉にはつなぎ文とよく似た表



1. 郭麗石棺 咸亨元 (670), 2. 永泰公主墓石槨 神龍2 (706),
3. 懿德太子墓壁面 神龍2 (706), 4. 赤洞墓墓誌 景龍2 (708),
5. 博統-嘉惠誌 開元15 (727), 6. 馮君衡墓墓誌蓋 開元1 (730),
7. 豆盧建墓墓誌 天寶3 (744), 8. 史思禮墓誌 天寶3 (744),
9. 張去逸墓墓誌 天寶6 (747), 10. 高元珠墓石棺 天寶15 (756),
11. 西安市西北政法學院34號唐墓出土天工簡 盛唐,
12. 西安市韓森寨十街出土蔓草花鳥紋八棱銀杯 初唐,
13. 龍門石窟鑿窟台刻大日如來臂釧,
14. 紅陶頭山室相華文雙壺 (天理參考館) 盛唐,
15. 双鸞文門形銀盒 (米・インディアナポリス美術館),
16. 室相華文花卉形銀盒 (白鷺美術館),
17. 何家村齊盛出土鍍金雙層紋銀盒,
18. 室相文花卉形銀盒 (白鷺美術館),
19. 李陝山墓出土室相花紋花卉形銀盒 開元26 (738) 以前,
20. 三北村齊盛出土忍冬花結銀鳳球,
21. 室相文菱花形銀盤 (スウェーデン・東アジア博物館),
22. 何家村齊盛出土鍍金石榴花紋銀盒, 23. 同鍍金飛獅紋銀盒

挿図6



1. 敦均莫高窟第341窟西壁佛坐像背光 初唐, 2. 同321窟南壁法華經變圖 (佛坐像背光) 初唐, 3. 同217窟西壁佛坐像年四 (705-7),
4. 同444窟西壁佛坐像背光 盛唐, 5. 同328窟南壁觀音變圖 (菩薩像背光) 盛唐, 6. 同180窟西壁佛坐像背光 天寶7 (748),
7. 同192窟南壁佛坐像背光 中唐, 8. 同100窟窟頂 五代, 9. 舞臺出土雙鳥紋菱花形銀盤, 10. 何家村齊盛出土狹角獸文門形銀盒,
11. 同鍍金鹿鳳紋銀盒, 12. 同鍍金鸞鳥紋銀盒, 13. アスターナ出土赤地花鳥文印花絹, 14. 遼陳順化文八花鏡 (五島美術館),
15. 金銀平脫花枝禽獸文八花鏡 (白鷺美術館), 16. 慶山寺塔址出土:彩盤 開元29 (741), 17. 鍍金銀貼四處唐草文八棱鏡 (天理參考館)

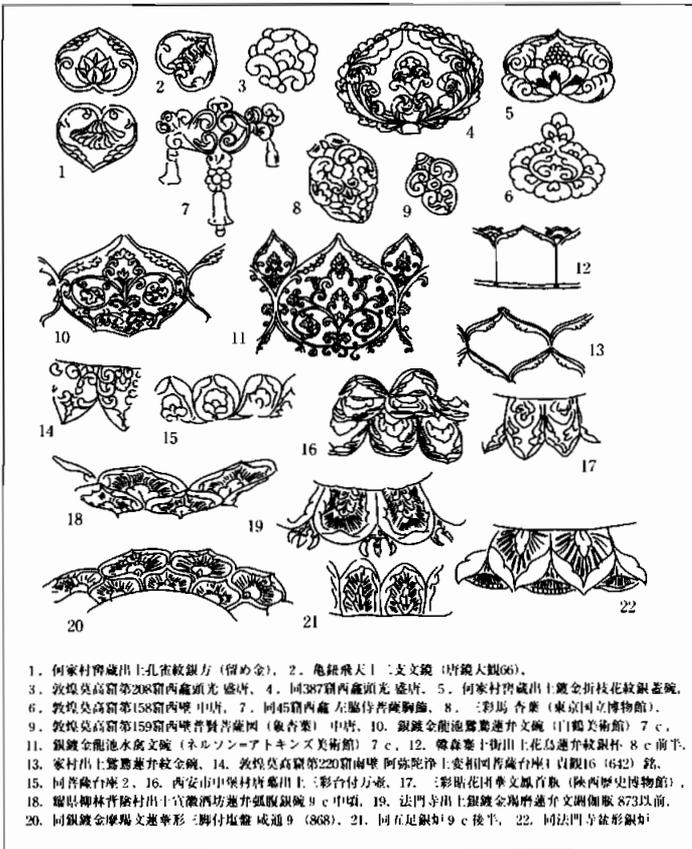
挿図7

現のものも多くあることから、両者は相互に影響し合いながら発展したことが推測される。

IV 独立文(挿図8・1~9)

一つの対葉形で一つの文様単位となる独立文は、敦煌莫高窟壁画の頭光部分の裝飾や装身具などにみることができ、八世紀以後の作例に用いられていることから、頭光部分の裝飾は先行するつなぎ文から発展したものであり、装身具などには唐草の中の対葉花文から派生したものがあると考えられる。

V 蓮弁裝飾(挿図8・10~22)



挿図8

1. 何家村唐墓出土孔雀紋銀方(留め金), 2. 亀鏡飛天1(支支鏡)(唐鏡大観66),
3. 敦煌莫高窟第286窟西甬頭光(盛唐), 4. 同387窟西甬頭光(盛唐), 5. 何家村唐墓出土鍍金折枝花紋銀蓋碗,
6. 敦煌莫高窟第158窟西甬壁菩薩胸飾(中唐), 7. 同45窟西甬左脇侍菩薩胸飾, 8. 三彩馬香奩(東京国立博物館),
9. 敦煌莫高窟第159窟西甬壁菩薩胸飾(中唐), 10. 銀鍍金龍池水禽文鏡(中唐), 11. 銀鍍金龍池水禽文鏡(中唐), 12. 銀鍍金龍池水禽文鏡(中唐), 13. 銀鍍金龍池水禽文鏡(中唐),
11. 銀鍍金龍池水禽文鏡(ネルソン-アトキンズ美術館) 7c, 12. 銀鍍金龍池水禽文鏡(ネルソン-アトキンズ美術館) 8c前半,
13. 家村出土鸞鳳蓮弁紋金鏡, 14. 敦煌莫高窟第220窟南壁阿彌陀淨土變相(唐), 15. 同16(642)銘,
15. 同青鏡台座2, 16. 西安市中樂村唐墓出土三彩台付方鏡, 17. 三彩貼花團鳳首鏡(陝西歷史博物館),
18. 耀州柳林普隆村出土寶鏡酒坊蓮弁紋銀鏡9c中頃, 19. 法門寺出土銀鍍金鳳鳴蓮弁文鏡(873以前),
20. 同銀鍍金鳳鳴蓮弁文鏡(868), 21. 同五足銀鏡9c後半, 22. 同法門寺三彩銀鏡。

蓮弁裝飾の例としては、内部に鳥や草花などの文様をあらわして文様区画としての機能をもつもの(挿図8・10~13)と、仏像の台座蓮弁のような列弁文(挿図8・14~22)の二種類がある。前者は七世紀後半から八世紀前半頃の金銀器によくみられるもので、後者は八世紀の陶磁器や九世紀以降の金銀器に例がある。

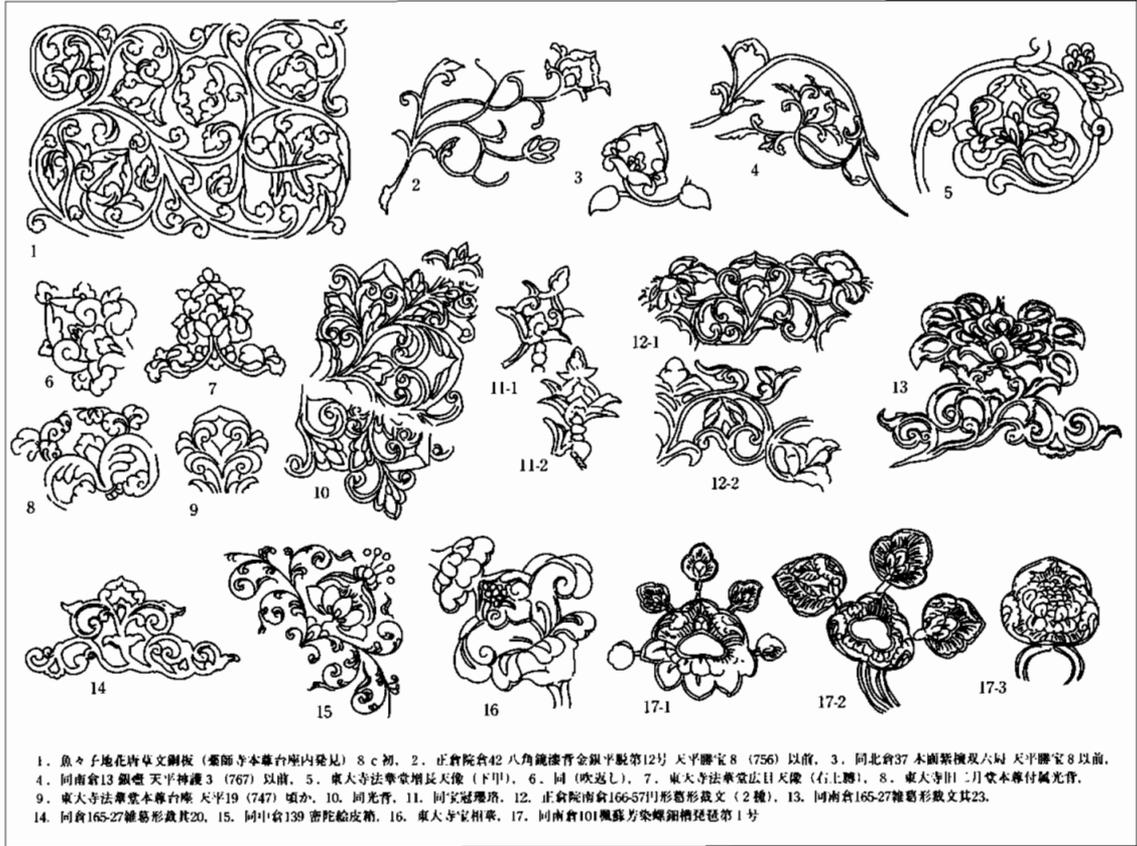
中国の対葉花文

中国の作例では、対葉形を使った初期的な文様は七世紀前半の唐草文と団花文にみることができ、その後、七世紀後半になると形が整い、ほぼ定型化された対葉花文が唐草文の中や団花文に数多く使われるようになり、つなぎ文、文様区画としての蓮弁形があらわれる。八世紀に入ると独立文や列弁文の裝飾にも対葉形が多く用いられるようになる一方で、唐草文や団花文の中には簡略化されたり、粗略な表現がみられるようになる。また対葉花文としての作例は唐草文、団花文ともに七世紀後半から八世紀前半に集中しており、七世紀末から八世紀初めに繊細かつ華麗な作品が多い。以上のことから、中国では七世紀前半に初期的な対葉花文が出現し、七世紀後半に完成、その後七世紀末から八世紀初頭をピークとして八世紀前半にかけて流行したもので、つなぎ文や独立文、蓮弁裝飾へと応用されながら、やがて衰退したと考えられる。

(二) 日本の作例

I 唐草の中にあらわされたもの

日本では唐草の中にあらわされた対葉形の例は、八世紀初めから中頃にみられ、中国の作例と同様に花や苞のような植物の一部として認識されるもの(Aタイプ)(挿図9)と、唐草の起点や連結部に配置され、文様としてのまとまりをつけた、アクセントに使用するもの(Bタイプ)(挿図10)に分けるこ



挿図9

とができる。しかしA・Bタイプはほぼ同時期にあらわれ、中国の例にみられたような時間差はない。また個々の作例を注意深くみていくと、中国の作例に直接的につながるものと、その変形あるいは発展形といえるものがある。前者は初唐様式を強く反映しており、後者には対葉花文の周囲にさらに花卉がつき、対葉形が小型化したものや、左右対称性をくずしたり、立体的に描こうとしたものが含まれる。

やや繁雑になるがここで具体例をあげると、薬師寺本尊台座内より発見された銅板の文様(挿図9・1)は、七世紀後半の王大禮墓誌(挿図1・10・2・4)や李勣墓誌(挿図2・5)、川大雲寺出土石函(挿図2・6)の文様に対応するものであり、法隆寺の伝橋夫人念持仏厨子の台座框(挿図10・2)と同様に対葉形を唐草の括りとして用いる例は、龍朔三年(六六三)の同州聖教序碑(挿図2・3)や神龍二年(七〇六)の懿德太子墓(挿図2・9)の裝飾文様にみることができ。また東大寺法華堂增長天像の吹返し部分(挿図9・6)とはほぼ同じ花形が、景龍二年(七〇八)の韋河墓誌(挿図2・17)にあり、同法華堂空絹索観音像宝冠飾金具(挿図10・9)、正倉院の金銀細装唐大刀(挿図10・7)や御冠残欠(挿図10・11)の文様は、白鶴美術館の銀鍍金花鳥唐草文八曲杯(挿図2・15)のそれに近く、初唐様式を引き継ぐものと考えられる。このほか正倉院の黄金莊大刀第一号の文様(挿図10・8)は、大明宮麟徳殿出土の埴(挿図1・8)や何家村窖藏出土の銀盒(挿図7・11)のものに近く、初唐風といえる。唐製とされる正倉院の銀壺に描かれた唐草文(挿図9・4)は、敦煌莫高窟第三三八窟(挿図1・2)、三三四窟(挿図1・3)などの初唐窟のものに対応することから、銀壺の文様に近い正倉院の八角鏡漆背金銀平脱第一二号の文様(挿図9・2)も初唐様式に含まれるとみなすことができよう。さらに東大寺法華堂広目天像の右上膊(挿図9・7)や同空絹索観音像の宝冠環珞(挿図9・11)、法隆寺伝法堂西の間中尊付属と考え



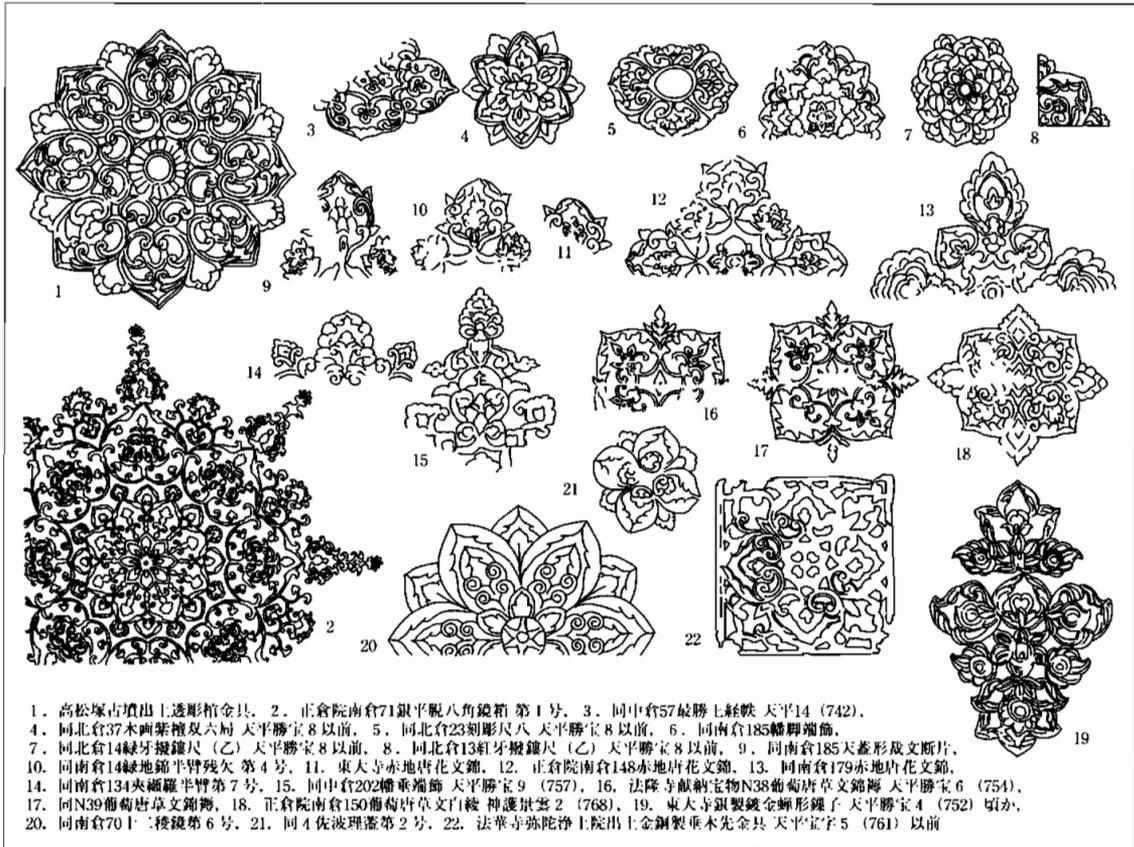
挿図10

られる光背（挿図10・14）の文様では対葉形の先端に花卉のような飾りがついて
 いる。これと同様の表現は神龍二年（七〇六）の永泰公主墓（挿図1・14）
 や前掲の韋洞墓にあり、これらも初唐様式の影響を受けたものといえるだろう。

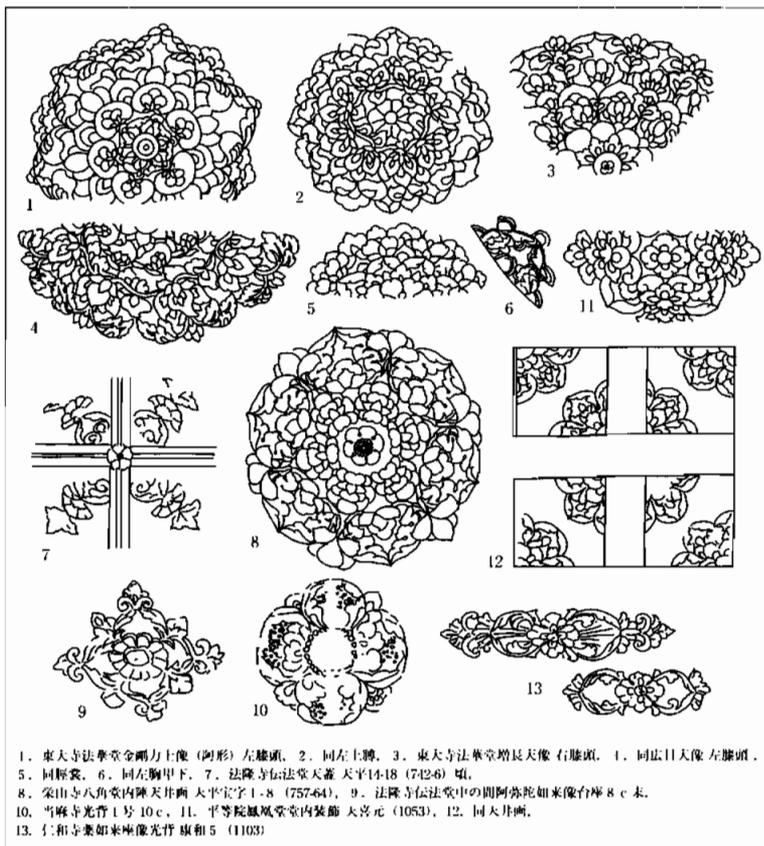
これに対し、正倉院の葛形裁文（挿図9・13）や密陀絵皮箱（挿図9・15）、
 東大寺の宝相華（挿図9・16）では、対葉形の上や下にさらに花卉がつき、対
 葉形は小さく描かれている。このような構成の花文は、今回調べた中国の作例
 の中にはみあたらない。また東大寺法華堂増長天の下甲（挿図9・5）では花
 文の内部に小さな花卉を重ねている。中国の作例では通常、栓形や切込みのあ
 る花卉形一つをあらわすのみであることを考えると、これもまた特殊な例とい
 える。さらにこの花文は、同じく法華堂の広目天の右上膊（挿図9・7）の文
 様とともに、花卉が手前に反るようにも描かれており、中国の作例にはほとん
 どみられない立体的な表現がなされた例として注目される。このほか正倉院の
 楓蘇芳染螺鈿琵琶第一号（挿図9・17）には対葉部分の左右対称性をくずし
 た表現をみることができ、中国の対葉形は厳格な左右対称性をもってあらわ
 されるのが通常であり、こうした点もまた中国の作例と比較したとき、異質な
 表現といえるだろう。ただし宝相華枝蔓八花鏡（唐鏡大観八九）や螺鈿鴛鴦宝
 相華文八花鏡（白鶴美術館）など八世紀半ば以降と考えられる鏡には、はつき
 りとした対葉形はないものの、琵琶の文様に近い花文（挿図15・1・2）があ
 らわされている。また前掲の正倉院の葛形裁文にもみられる花文の周囲に放射
 状に葉を配置する表現は、やはり対葉形は描かれてはいないが、盛唐期の敦煌
 莫高窟第六六窟や七九窟の文様（挿図15・3・4）にある。よって、これらは
 盛唐から中唐期の文様表現をとり入れたものと理解することができよう。

II 団花文（挿図11・12）

団花文も唐草の例と同様に日本では八世紀初頭から中頃に作例が多い。その



挿図11



挿図12

後一時衰退するが、十二世紀に平等院鳳凰堂の堂内裝飾として使用された例がある。中国の作例と比較すると、団花文の中にも初唐から盛唐期の中国様式の影響を強く受けたと考えられるものと、その発展形あるいは変形といえるものがある。

具体的には、高松塚古墳出土の透彫棺金具(挿図11・1)はC字形を組み合わせた団花文であるが、同様のC字形を使用した花文は、敦煌莫高窟第三二〇・一六六・二一七窟(挿図4・5・6・9)をはじめとする初唐から盛唐初期の作例にみることで、花卉の形は七世紀後半の大明宮麟德殿出土埴

(挿図5・8)に近い。正倉院の銀平脱八角鏡箱第一号の文様(挿図11・2)は何家村出土の鍍金柘榴花文銀盒と同系統の文様に属するものだが、銀盒よりも一層複雑で対葉形を多用していることからこれは初唐様式に含まれるものと考えられる。また唐草文の項でもとりあげた対葉形の先に飾りをつける表現が東大寺法華堂金剛力士像(阿形)の左膝(挿図12・1)や法隆寺伝法堂の天蓋、同中の間の阿弥陀如来像台座(挿図12・7・9)にある。これらはすでに述べたとおり初唐期の文様の特徴を反映、発展させたもので、中国の团花文では敦煌莫高窟第二一七窟(挿図4・1)や何家村窖藏出土の銀器(挿図6・17・22)に同様の表現をみることができる。このように初唐風の文様が散見される一方で、正倉院や東大寺に伝わる錦の中には、盛唐期の敦煌莫高窟第三二八窟(挿図5・1)や一〇三窟(挿図5・4)の花文とほぼ同じ形の文様をあらわすもの(挿図11・9・12)があり、当時、盛唐様式の花文も並行して広く行われていたことが知られる。こうした錦と同じような構成の文様で対葉形が小型化したものもあり(挿図11・13)、これは盛唐風の文様のさらなる発展形と考えられよう。このほか栄山寺八角堂の天井画(挿図12・8)とほぼ同形の構成要素をもつ唐花文が敦煌莫高窟第一二〇窟(挿図15・5)にあり、法華寺阿弥陀淨土院出土の垂木先金具(挿図11・22)の花弁の形は、三兆村唐墓出土の銀薰球(挿図6・20)のそれと近いことから、これらもまた盛唐様式を受けたものといえる。

以上のような強い中国風を示す作例に対し、中国様式の変形、発展形と考えられるものとして、唐草文と同様、対葉形の内部に小弁を重ねる表現を、正倉院の最勝王経帙(天平十四年銘)(挿図11・3)や錦の文様(挿図11・9・12・12・1・3)にみることができ。対葉形の左右対称性をくずした表現も東大寺の銀製鍍金蟬形鏤子(挿図11・19)にある。鏤子の文様は自然に近い葉形を組み合わせて形作られており、こうした具象的な文様は東大寺法華堂広目天像



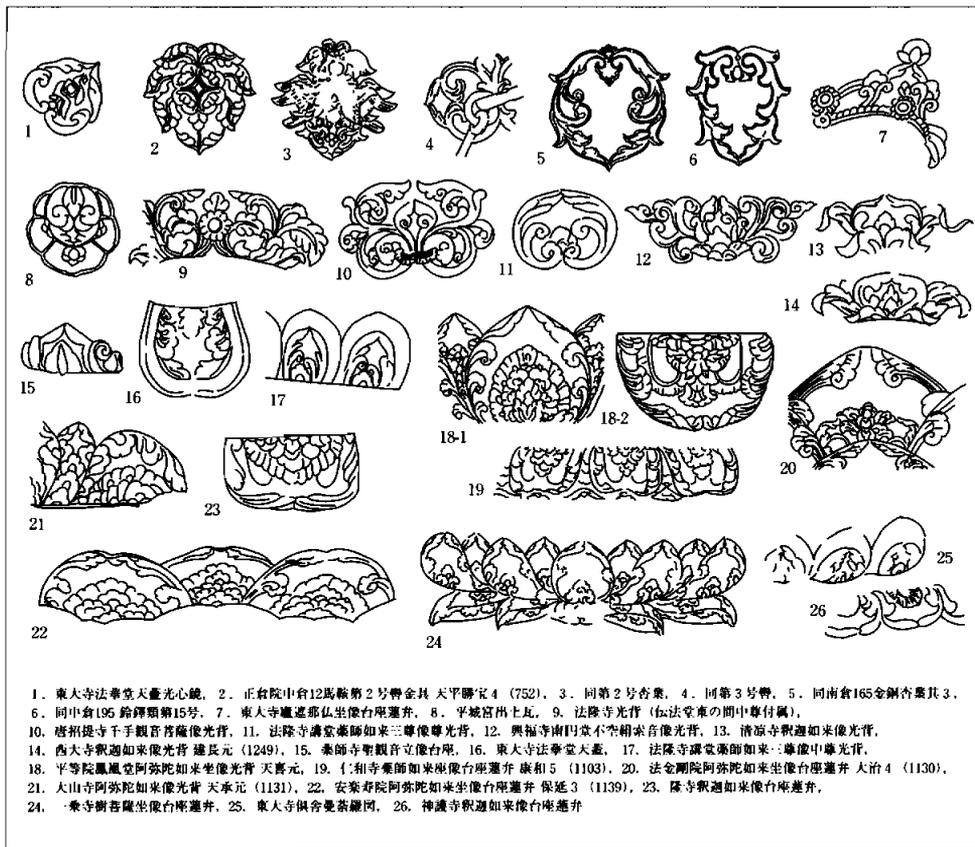
1. 正倉院南倉71 銀平脱八角鏡箱第1号。2. 下総国分寺出土瓦。3. 東大寺法華堂鍍金剛神像 胸甲。
4. 正倉院中倉155 緑地彩絵第31号。5. 東大寺法華堂金剛力士像 阿形 上甲。6. 正倉院中倉202 帙蓋古鏡。
7. 法隆寺光背(法隆寺東の間の中尊付属)。8. 唐招提寺下手観音菩薩像光背。9. 藤原院弥勒仏坐像台座蓮弁 寛平4(890)。
10. 室生寺金堂地蔵菩薩像光背。11. 法隆寺講堂東師三尊像左脇侍。12. 鴨麻寺光背3号。13. 平等院鳳凰阿弥陀如来坐像天蓋 天喜元。
14. 円成寺阿弥陀如来像光背。15. 興福寺南円堂不空観音像光背

挿図13

の左膝頭(挿図12・4)にも用いられている。天理参考館の鍍金銀貼唐草八稜鏡(挿図7・17)には、左右対称性を維持しつつも自然に近い形の葉を向き合わせて対葉形を作る例があることから、これらは盛唐期の文様表現を受けたものと考えられよう。

また、平等院鳳凰堂の天井格間や柱絵に奈良時代以降、一時途絶えていた対葉花文が描かれている。これらは対葉部分を小さくあらわす点や、花卉の重ね

方が東大寺法華堂諸像の文様に近いことから、すでに指摘されているように奈良朝文様の復古的表現であると考えられる。



挿図14

1. 東大寺法華堂天蓋光心鏡, 2. 正倉院中倉12馬鞍第2号髹金具 天平勝宝4 (752), 3. 同第2号杏葉, 4. 同第3号髹, 5. 同南倉165金銅杏葉其3, 6. 同中倉195 鈴鐺類第15号, 7. 東大寺蓮座部仏坐像台座蓮弁, 8. 平城宮出土瓦, 9. 法隆寺光背 (仏法堂東の期中尊付属), 10. 唐招提寺千手観音菩薩像光背, 11. 法隆寺講堂薬師如来三尊像尊光背, 12. 興福寺南円堂不空絹索音像光背, 13. 清涼寺釈迦如来像光背, 14. 西大寺釈迦如来像光背 建長元 (1249), 15. 桑師寺聖観音立像台座, 16. 東大寺法華堂天蓋, 17. 法隆寺講堂薬師如来三尊像中尊光背, 18. 平等院鳳凰堂阿彌陀如来坐像光背 天喜元, 19. 仁和寺薬師如来座像台座蓮弁 康和5 (1103), 20. 法金剛院阿彌陀如来坐像台座蓮弁 大治4 (1130), 21. 大山寺阿彌陀如来像光背 天承元 (1131), 22. 安養寺院阿彌陀如来坐像台座蓮弁 保延3 (1139), 23. 隆寺釈迦如来像台座蓮弁, 24. 桑師寺聖観音坐像台座蓮弁, 25. 東大寺供舎曼荼羅圖, 26. 神護寺釈迦如来像台座蓮弁

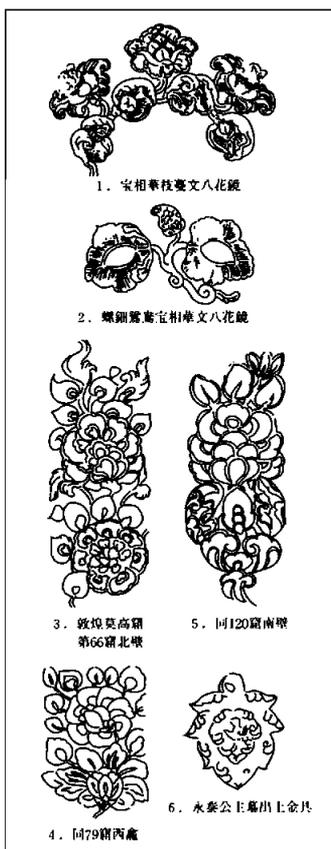
III つなぎ文 (挿図13)

つなぎ文は八世紀前半から使用が認められる。奈良時代では仏像の着衣や工芸品の裝飾文様としても使われるが、その後は仏像の光背部分に遺例が多い。仏像光背の裝飾としては鎌倉時代以降も作例があることから、つなぎ文は光背の意匠として定着して長く使用されたようである。

中国の作例と対照すると、正倉院の銀平脱八角鏡箱第一号の文様 (挿図13・1) は、団花文の項で述べたとおり初唐風のものであり、同じく正倉院の緑地彩絵箱第三号の文様 (挿図13・4) のC字形の使用も、すでにみたように初唐終わり頃から盛唐初めの特徴を受けたものといえる。挿図13・5としてあげた東大寺法華堂金剛力士像 (阿形) の下甲の文様は対葉形が魚鱗風に重なる珍しいものであるが、盛唐期の敦煌莫高窟第七四窟や四四四窟などの光背に蓮弁を同様に重ねる例があり、下甲はこうした文様をアレンジしたものと理解できよう。

IV 独立文 (挿図14・1~14)

独立文もつなぎ文と同様、八世紀前半から作例があり、その後も継続して使用されている。飾り金具などに単体で用いるもの (挿図14・1~8) と、仏像



挿図15

光背文様（挿図14・9～14）のようにつなぎ文を分断したと考えられるものがあり、光背意匠としてつなぎ文と同様、長く用いられたようである。

単体で使用されるものうち、東大寺法華堂天蓋光心鏡の文様（挿図14・1）は龜紐飛天十二支文鏡（唐鏡大観六六）（挿図8・2）と同文で、天平勝宝四年の銘をもつ馬鞍第二号の杏葉（挿図14・2）は、永泰公主墓出土の飾金具（挿図15・6）の中にはほぼ同じ形のをみることができ。

V 蓮弁装飾（挿図14・15～26）

対葉形を蓮弁装飾に用いた例は東大寺法華堂天蓋など八世紀の作品にいくつみることができるが、以後衰退し、十一世紀から十二世紀にかけて再び行われるようになる。奈良時代の作例や中国の列弁文の例では対葉形そのものが意匠の中心となっているが、平安時代後期の作例では意匠の中心は花卉内部の花形にあり、対葉形は周縁の装飾として用いられている。両者をつなぐ平安時代前期の作例はみあたらず、また華やかな装飾蓮弁の現存する最も早い例は平等院鳳凰堂の本尊阿弥陀如来像の台座蓮弁（挿図14・18）であり、以降作例が多くなる。団花文の項でも述べように、平等院鳳凰堂の堂内装飾には奈良時代の文様を彷彿とさせる文様表現が認められることから、こうした平安時代後期に盛行した蓮弁装飾は、奈良朝文様に触発されて日本で新たに作り出されたものと考えられる。

日本の対葉花文

日本では正倉院の国家珍宝帳記載の品や東大寺大仏開眼会関係品をはじめとする八世紀初頭から八世紀半ば頃までの作品に対葉花文や対葉形を用いた文様が多くある。唐草文・団花文の例は奈良時代以降は衰退するが、つなぎ文・独立文は仏像光背の装飾として以後も継続して用いられ、伝統的意匠として定着

したようである。また蓮弁装飾は平安時代後期に再び作例が多くなるが、これは奈良朝様式に学んだ復古的文様と考えられる。

中国の作例と比較すると、日本の作例には、①初唐様式を受けたもの、②盛唐様式を受けたもの、③①②の発展形、変形と呼べるものがある。これらはほぼ並行して用いられており、中国の作例に倣ったと考えられるものの中では、最も華やかな文様が多く生み出された七世紀末から八世紀初め頃の様式を反映したものが多く、また中国様式の発展形、変形と呼べるものの中には、対葉花文が衰退した盛唐期以降の文様表現と対葉形を組み合わせた例もある。以上のことから日本では、対葉花文は八世紀初頭から半ばにかけて流行した文様であり、完成度が高い初唐風の文様を意

		600	650	700	750	800	850	900	1000	1100	1200	
中国	唐草文										
	団花文										
	つなぎ文										
	独立文										
	蓮弁装飾(界線)										
	蓮弁装飾(列弁)										
日本	唐草文										
	団花文										
	つなぎ文										
	独立文										
	蓮弁装飾										

表1：対葉花文および関連文様の流行時期

識的に選択し、適宜アレンジを加えながら使用していたということができらるろう。

三 結 び

以上、中国と日本の作例を分類し、比較検討した結果、次のようなことが明らかとなった(表1・2参照)。

- ① 中国では対葉花文は七世紀前半に出現し、七世紀末から八世紀初頭頃を頂点として、七世紀後半から八世紀前半にかけて流行した文様である。
- ② 中国では対葉花文に続いて対葉形を用いたつなぎ文、独立文、蓮弁装飾があらわれる。つなぎ文は八世紀前半、独立文は八世紀後半を中心に流行し、蓮弁装飾では文様区画としての蓮弁形が七世紀後半から八世紀前半にかけて、列弁文の装飾としては九世紀頃まで行われていた。
- ③ 日本では対葉花文は八世紀初頭に伝来し、以後、八世紀中葉にかけて流行した。
- ④ 日本では対葉花文にやや遅れて対葉形を用いたつなぎ文、独立文、蓮弁装飾が行われるようになる。つなぎ文、独立文は仏像の光背意匠として定着し、長く使用される。蓮弁装飾は九世紀以降一時的にとだえ、十一世紀から十二世紀に再び多くなるが、これは当時の中国からの直接的影響というよりも、奈良朝文様に由来するものと考えられる。
- ⑤ 日本の作例には初唐および盛唐の様式を受けたものと、その発展形、変形とよべるものがあり、これらはほぼ並行して使用される。
- ⑥ 日本の作例で中国の様式に倣ったと考えられるものの中には、初唐様式を踏襲した例が多く、日本では最も完成度が高い中国の七世紀末から八世紀初めの様式を選択して、長く用いていたと考えられる。

⑦ 日本の作例に顕著な特徴としては次の三点があげられる。

- a 対葉形の内部に小さな花卉を重ねる。
- b 周囲に花卉を付け加え、対葉形は小さくあらわして花の構成要素の一つとして扱う。
- c 対葉部分を非対称としたり、具象化した葉を向き合わせて表現するなど

絵画的にあらわす。

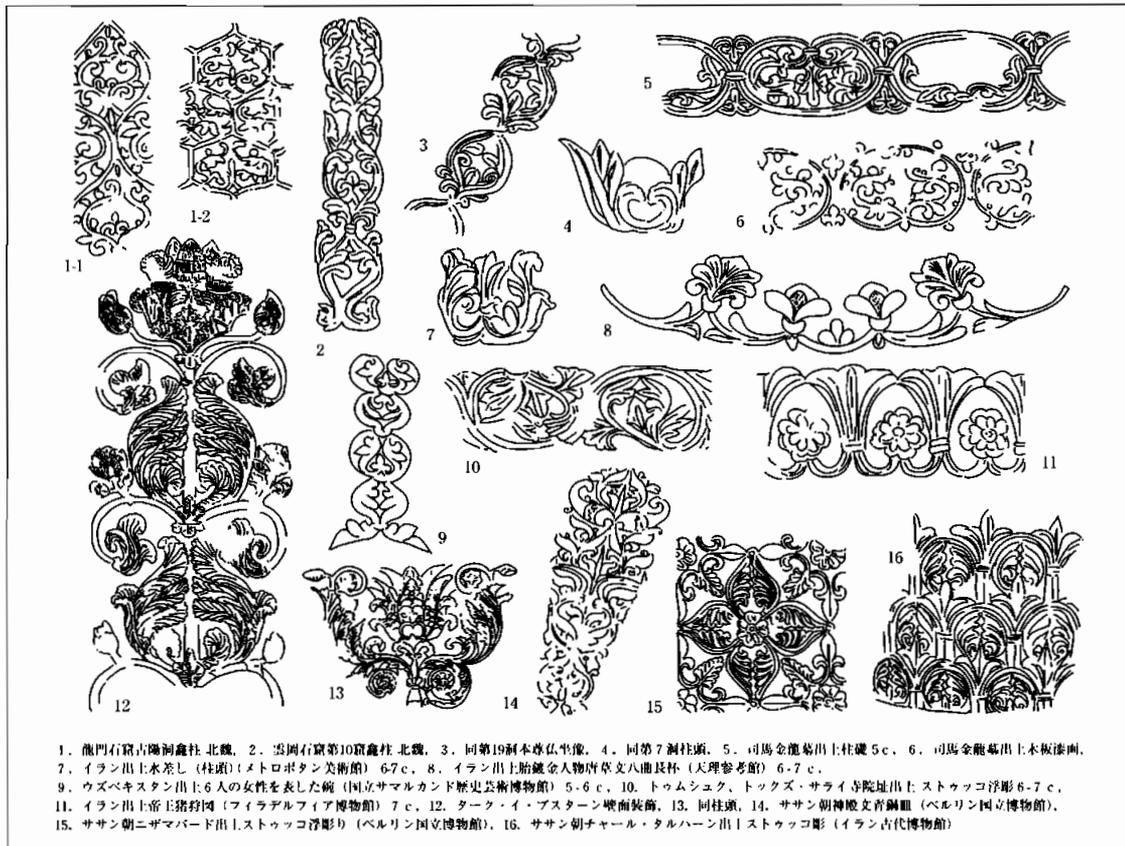
ただし、こうした表現が日本独自の変容なのかという点については、朝鮮半島の様式の流れを汲むものである可能性も視野に入れ、今後さらなる検討が必要であらう。

最後に対葉花文の発生について若干の私見を述べ、結びとしたい(挿図16参照)。

対葉花文の起源については、これまでパルメット唐草の先端に納まりをつけるために考案されたもの⁹⁾、ササン朝ペルシアや中央アジア花文の対葉形と関係するもの、横つなぎパルメット文様の発展形または西方銀器の影響、グプタ式唐草から発生したもの¹¹⁾などとする説が述べられてきた。

今回、中国の作例を分類、整理したところ、中国における対葉花文の早い例は唐草文と団花文にあることが明らかとなった。そしてそれぞれの初期の形態を観察すると、次のようなことがいえる。

- 唐草文では、対葉形は①大きな蕾または果実のような形をしたもの(表2・②)、②半パルメット形を対向させたもの(表2・③)、③重ね合わせた葉を対向させるもの(表2・④)、④グプタ式唐草の巻葉を対向させるもの(表2・⑤)が初期の作例にある。いずれも唐草の始点または末端部分に配置され、七世紀前半頃のものと考えられる。①③は葡萄文様と共に描かれ、④もインド起源の文様であることから、これらは西方的な要素を多分に含んだ文様であるといえるだろう。また以後の唐草文にあらわされた対葉形をよく見ると、対葉



挿図16

部分の片側が、尖頭形の小さな葉形と雲のように巻込んだ葉形の二つの部分で構成されるものが多い。いま仮にこれを複葉式と呼ぶと、この複様式対葉形の初期形式(表2・⑤⑩)はグプタ式唐草の中にもみることが出来る。このことから、唐草の中の対葉花文の発展にはグプタ式唐草が大きく影響した可能性が考えられよう。しかし、対葉形の内部に必ずといっていいほどあらわされる椀形や花弁形は、グプタ式唐草だけでは説明できない。このような形の先例は、むしろ北魏時代のパルメット唐草(挿図16・1・3・6)や六・七世紀の西方銀器(挿図16・7・9・14)、ターク・イ・プスターンの柱頭裝飾(挿図16・12・13)にあり、パルメットあるいはアカンサス系の文様要素といえる。また③の葉を重ね合わせたタイプの対葉形やこの後に述べる団花文では、初期段階から対葉形の内部に小さな花弁形が描かれているので、こうした表現が取り入れられた可能性も考えられよう。

次に団花文についてみてみよう。団花文の初期の作例には、①半パルメットが対向する形の花弁をもつもの(表2・①)と、②内部に小さな花弁形がある内巻きの花弁をもつものがある(表2・⑥⑦)。①は六世紀末から七世紀初め、②は七世紀前半頃と考えられるもので、いずれも四弁花である。これらは連珠文と共に描かれており、ここでも西方的な要素がみとめられる。その一方で初期の作例の中には対葉形の花弁の間に横向きの花形を挿入したものがあり(表2・⑦⑧)、こうした表現は鞏嶺石窟の天井の花文に通じるもので、伝統的な花文表現との融合を示すものと考えられる。また後の多くの花弁をもつようになった団花文の中には、隣接する花弁との間に萼形や括りがあらわされるものがある。このような表現はすでに石渡氏が指摘されているように西方起源の横つなぎのパルメット文様(挿図16・8・11)の応用とみることができよう。

さらに対葉部分の基本構成をみてみると、唐草文では複様式が多かったが、団花文では、片側が一枚の半パルメット形でできた単葉式とも呼べるものがほと

などを占めている。

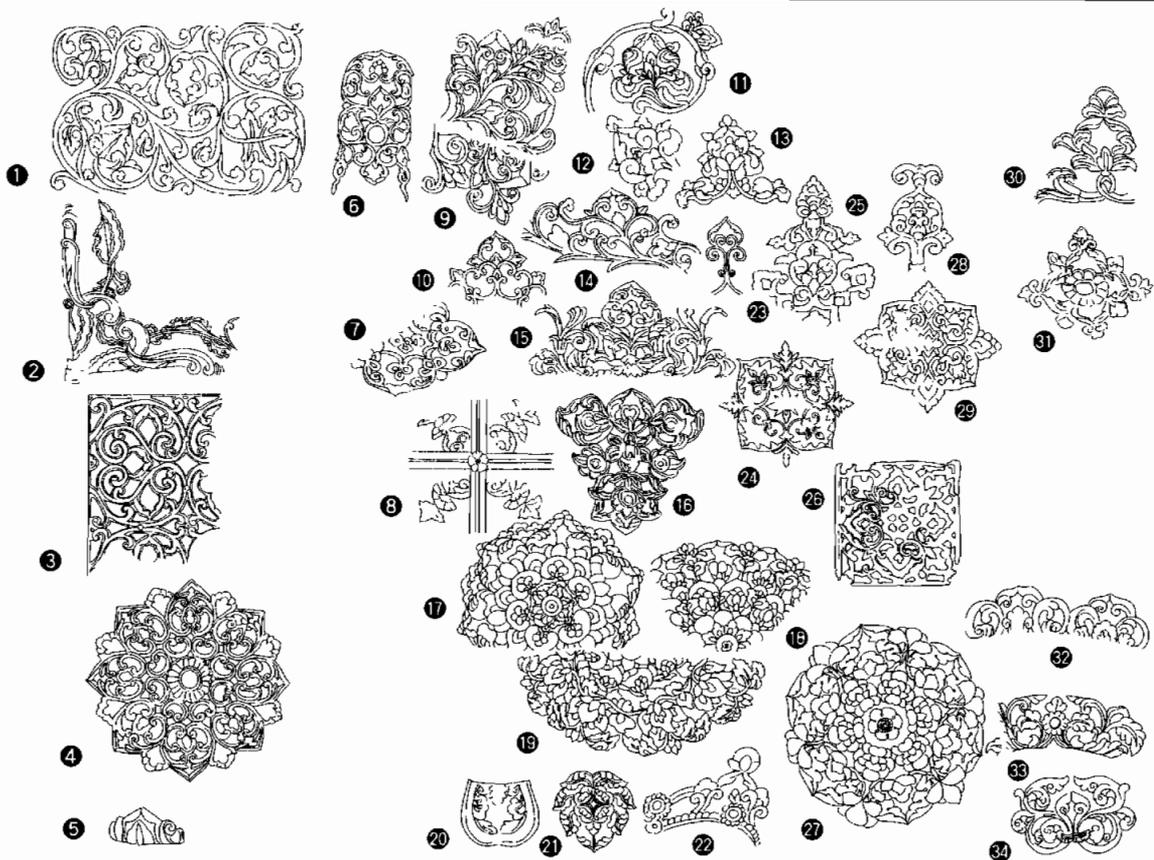
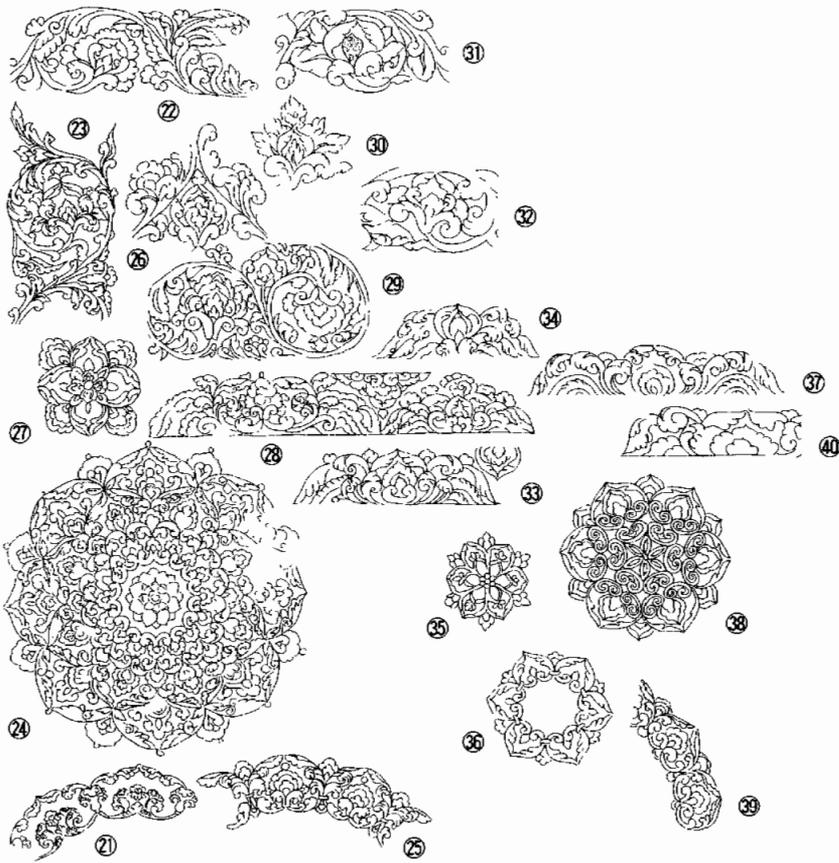
以上のように、唐草文と団花文に使用される対葉形を分けてみると、初期の形態は両者の間でかなり異なっており、対葉花文として完成した後も唐草文には複様式対葉形が多く、団花文には単葉式対葉形が多いという傾向があることがわかる。また両者の原形と考えられるもの、あるいは完成形と深い関わりをもつと思われる文様表現が複数あり、それらはいずれも西方より伝来した要素を多く含んでいる。こうした点から、唐草文、団花文どちらの場合も対葉花文は西方の文様意匠の刺激を受けて作り出されたと推測されるが、双方の起源を一元的なものに求めることはできないと考えられる。なお北魏時代のパルメット唐草や、ササン朝ペルシアの遺例には、対葉花文を思わせる半パルメットあるいはアカンサスを対向させた文様（挿図16・15・16）があるが、中国における対葉花文の初期の作例と比較すると形が大きく異なっていることから、これらを中国で流行した対葉花文の直接的な原形とみなすこともできないだろう。こうした事柄に加えて、唐草文・団花文ともに対葉花文の初期形態と思われる文様が七世紀前半にあらわれ、七世紀後半には完成形が出現することを考え合わせると、唐草文と団花文の二系統の対葉花文は、西方伝来の新しい文様の影響を受けて、七世紀第二四半期から第三四半期の中国で、ほぼ同時期に生み出されたものと考えることができる。既存の文様からの直接的発展形でもなく、また実在の植物から着想を得たものでもない空想上の花文であるゆえにこの二系統の花文はその発生当初から高い自由度と適応性を備えていた。そして、その後、西方起源の横つなぎのパルメット文様の意匠を取り入れ、また相互に影響し合いながら多彩なヴァリエーションを生み出し、裝飾性豊かな植物文様として広く応用されていったと考えられるのである。

〔付記〕

本稿は平成十六年度メトロポリタン東洋美術研究センターの研究助成金による研究成果である。ここに記して感謝申し上げます。

注

- (1) 山本忠尚「日本の美術三五八 唐草紋」。源豊宗「大和を中心とする日本彫刻史」（近畿観光会 一九四二）および再録版として「日本彫刻史」——大和を中心とする——（源豊宗著作集 日本美術史論究 2 総説・古代）思文閣出版 一九九八）に記述がある。再録版には「対葉花文の名称とは、二片の木葉が宝珠形に左右から結合した文様と解されているが、実は、蓮弁の左右両辺が右側に反りかえった形の文様化したもので、天平時代の三次元的視覚の所産である。」との補注がある。
- (2) 川勝政太郎「法華堂本尊の裝飾文様」『東大寺法華堂の研究』大八州出版 一九四八
- (3) 本稿の挿図・表に使用した文様は展覧会図録等の写真図版から栗田が描き起こした。ただし挿図1・12石塔婆五尊仏の文様は長廣敏雄「唐代の唐草文様」（『仏教芸術』八）の挿図にもとづく。
- (4) 本稿では「中国石窟」シリーズ（平凡社）の時代区分に従い、初唐期を六一八〜七〇〇年、盛唐期を七一〇〜七六三年とした。
- (5) 西川新次・水野敬三郎「鳳凰堂の彫刻」『平等院大観 第二巻 彫刻』岩波書店 一九八七
- (6) 『敦煌石窟全集十四 図案卷（下）』九二頁
- (7) 注6前掲書九五頁
- (8) 山本忠尚「日本の美術358 唐草紋」至文堂 一九九六
- (9) 林良一「東洋美術の裝飾文様 植物文編」同朋社出版 一九九二
- (10) 石渡美江「唐鏡における西方銀器の影響」『古代オリエント博物館紀要』一八 古代オリエント博物館 一九九七
- (11) 安藤佳香「佛教莊嚴の研究 グプタ式唐草の東伝」中央公論美術出版 二〇〇三
- (12) 注7前掲書 四・五頁
- (13) 『中国石窟 鞏県石窟寺』（平凡社 一九八三）図版二二・九三・九四
- (14) 注10前掲書



	600	650
中 国		
日 本		

表2：7～8世紀における中国・日本の主な作例

表2・挿図 図番号対応一覧

- 【中国】
- ① 敦煌莫高窟第四〇一窟西壁 隋 (挿図3・1)
 - ② 同第二〇九窟窟頂 初唐 (挿図2・12)
 - ③ 同第三二二窟窟頂 初唐 (挿図2・11)
 - ④ 同第三八七窟窟頂周縁 初唐 (挿図2・10)
 - ⑤ 蘇氏墓墓誌 貞觀八(六三四) (挿図2・1)
 - ⑥ 敦煌莫高窟第三七五窟窟頂 初唐 (挿図3・2)
 - ⑦ 同第三七三窟窟頂 初唐 (挿図3・3)
 - ⑧ 同第三〇五窟窟頂 初唐 (挿図3・5)
 - ⑨ 同第三二〇窟南壁 阿弥陀淨土變相圖菩薩台座二 貞觀二六(六四二) 銘 (挿図8・14)
 - ⑩ 尉遲敬德墓墓誌蓋 顯慶四(六五九) (挿図2・2)
 - ⑪ 同州聖教序碑 龍朔二(六六三) (挿図2・3)
 - ⑫ 李勣墓墓誌 總章二(六六九) (挿図2・5)
 - ⑬ 王大禮墓墓誌 咸亨元(六七〇) (挿図2・4)
 - ⑭ 郭麗石棺 咸亨元(挿図6・1)
 - ⑮ 敦煌莫高窟第三三五窟窟頂 垂拱二(六八六) 銘 (挿図3・8)
 - ⑯ 趙府君墓墓誌 武周(六八四) 七〇五 (挿図1・17)
 - ⑰ 敦煌莫高窟第三二三窟窟頂 載初(六九〇) 頃 (挿図3・9)
 - ⑱ 独孤思貞墓墓誌 神功元(六九七) (挿図1・11)
 - ⑲ 川大雲寺出土舍利容器(銀容器) 延載元(六九四) 以前 (挿図2・7)
 - ⑳ 敦煌莫高窟第三二三窟窟頂 万歲三(六九七) 銘 (挿図4・3)
 - ㉑ 韓森奏出土鸞鳥紋菱花形銀盤 (挿図7・9)
 - ㉒ 永泰公主墓石槨 神龍二(七〇六) (挿図1・13)
 - ㉓ 同石門 (挿図1・14)
 - ㉔ 敦煌莫高窟第二二七窟窟頂 神龍年間(七〇五) 七 (挿図4・1)
 - ㉕ 同第二一七窟西龕光背 神龍年間(挿図7・3)
 - ㉖ 韋洞墓石槨 景龍二(七〇八) (挿図2・17)
 - ㉗ 懿德太子墓壁画 神龍二(七〇六) (挿図6・3)
 - ㉘ 韋洞墓墓誌 景龍二(挿図6・4)
 - ㉙ 賀蘭都督墓墓誌 景龍三(七〇九) (挿図1・16)
 - ㉚ 薛氏墓誌 景雲元(七一〇) (挿図1・18)
 - ㉛ 阿史那毗伽特勤墓墓誌 開元一二(七二四) (挿図1・20)
 - ㉜ 楊執一墓墓石門 開元一五(七二七) (挿図1・21)
 - ㉝ 同墓誌 (挿図6・5)
 - ㉞ 馮君衡墓墓誌 開元一七(七三〇) (挿図6・6)
 - ㉟ 李景由墓出土宝相花紋花卉形銀盒 開元二六(七三八) 以前 (挿図6・19)
 - ㊱ 慶山寺塔址出土三彩盤 開元二九(七四二) (挿図7・16)
 - ㊲ 張去逸墓墓誌 天寶六(七四七) (挿図6・9)

- ㊳ 三兆村唐墓出土忍冬花結銀薰球 (挿図6・20)
 - ㊴ 敦煌莫高窟第一八〇窟西龕仏坐像光背 天寶七(七四八) (挿図7・6)
 - ㊵ 高元珪墓石棺 天寶十五(七五六) (挿図6・10)
- 【日本】
- ① 魚々子地花唐草文銅板(薬師寺本尊台座内発見) (挿図9・1)
 - ② 法隆寺伝橘夫人念持仏厨子 (挿図10・2)
 - ③ 大官大寺出土隅木端飾金具 和銅四(七一) 以前 (挿図10・1)
 - ④ 高松塚古墳出土透彫棺金具 (挿図11・1)
 - ⑤ 薬師寺聖観音立像台座 (挿図14・15)
 - ⑥ 正倉院北倉三八 金銀細装唐大刀 天平勝宝8以前 (挿図10・7)
 - ⑦ 同中倉五七最勝王経帙 天平十四(七四二) (挿図11・3)
 - ⑧ 法隆寺伝法堂天蓋 天平十四(七四二) 頃 (挿図12・7)
 - ⑨ 東大寺法華堂本尊光背 天平十九(七四七) 頃か (挿図9・10)
 - ⑩ 同本尊宝冠飾金具 (挿図10・9)
 - ⑪ 同增長天像(下甲) (挿図9・5)
 - ⑫ 同增長天像(吹返し) (挿図9・6)
 - ⑬ 同広目天像(右上膊) (挿図9・7)
 - ⑭ 正倉院北倉一五七礼服御冠残欠 天平勝宝四(七五二) 頃 (挿図10・11)
 - ⑮ 東大寺金銅八角燈籠 天平勝宝四頃 (挿図10・12)
 - ⑯ 東大寺銀製鍍金蟬形鏤子 天平勝宝四頃か (挿図11・19)
 - ⑰ 東大寺法華堂金剛力士像(阿形) 左膝頭 (挿図12・1)
 - ⑱ 同增長天像 右膝頭 (挿図12・3)
 - ⑲ 同広目天像 左膝頭 (挿図12・4)
 - ⑳ 同天蓋 (挿図14・16)
 - ㉑ 正倉院中倉一二馬鞍第二号轡金具 天平勝宝四 (挿図14・2)
 - ㉒ 東大寺廬遮那仏坐像台座蓮弁 (挿図14・7)
 - ㉓ 正倉院南倉一九唐古楽安君子半臂残欠第九号 (挿図10・22)
 - ㉔ 法隆寺献納宝物N三九葡萄唐草文錦褥 (挿図11・17)
 - ㉕ 正倉院中倉二〇二幡垂端飾 天平勝宝九(七五七) (挿図11・15)
 - ㉖ 法華寺阿弥陀淨土院出土金銅製垂木先金具 天平宝字五(七六一) 以前 (挿図11・22)
 - ㉗ 榮山寺八角堂内陣天井画 天平宝字一(七七五) 六四 (挿図12・8)
 - ㉘ 正倉院南倉一五〇葡萄唐草文白綾 神護景雲二(七六八) (挿図10・23)
 - ㉙ 同 (挿図11・18)
 - ㉚ 法隆寺光背(伝法堂西の間中尊付属) (挿図10・14)
 - ㉛ 同伝法堂の間阿弥陀如来像台座 (挿図12・9)
 - ㉜ 唐招提寺千手観音菩薩像光背 (挿図13・8)
 - ㉝ 法隆寺光背(伝法堂東の間中尊付属) (挿図14・9)
 - ㉞ 唐招提寺千手観音菩薩像光背 (挿図14・10)

参考文献

*単行本

- 【響堂山石窟】桐朋文化学院京都研究所 一九三七
- 【世界美術全集一〇 サーサーン・イーラーン・イスラーム】平凡社 一九五四
- 【日本彫刻史基礎資料集成 平安時代 造像銘記篇一】中央公論美術出版 一九六六
- 【日本彫刻史基礎資料集成 平安時代 造像銘記篇三】中央公論美術出版 一九六七
- 【日本彫刻史基礎資料集成 平安時代 造像銘記篇五】中央公論美術出版 一九七〇
- 【日本彫刻史基礎資料集成 平安時代 造像銘記篇六】中央公論美術出版 一九七三
- 出土文物展覽工作組編『文化大革命期間出土文物(第一輯)』文物出版社 一九七三
- 新疆維吾爾自治區博物館編纂『新疆出土文物』文物出版社 一九七五
- 【大和古寺大觀第二卷 当麻寺】岩波書店 一九八五
- 【大和古寺大觀第三卷 元興寺棟梁坊 元興寺 大安寺 般若寺 十輪院】岩波書店 一九七
- 七
- 【大和古寺大觀第四卷 新薬師寺 白毫寺 円成寺】岩波書店 一九七七
- 【大和古寺大觀第六卷 室生寺】岩波書店 一九七六
- 正倉院事務所編『正倉院の金工』日本経済新聞社 一九七七
- 【奈良六大寺大觀第一卷 法隆寺一】岩波書店 一九七九
- 【奈良六大寺大觀第二卷 法隆寺二】岩波書店 一九七九
- 【奈良六大寺大觀第三卷 法隆寺三】岩波書店 一九七九
- 【奈良六大寺大觀第四卷 法隆寺四】岩波書店 一九八〇
- 【奈良六大寺大觀第五卷 法隆寺五】岩波書店 一九八〇
- 【奈良六大寺大觀第六卷 薬師寺全】岩波書店 一九八〇
- 【奈良六大寺大觀第七卷 興福寺一】岩波書店 一九七九
- 【奈良六大寺大觀第八卷 興福寺二】岩波書店 一九八〇
- 【奈良六大寺大觀第九卷 東大寺一】岩波書店 一九八〇
- 【奈良六大寺大觀第十卷 東大寺二】岩波書店 一九七九
- 【奈良六大寺大觀第十一卷 東大寺三】岩波書店 一九八〇
- 【奈良六大寺大觀第十三卷 唐招提寺二】岩波書店 一九七二
- 【奈良六大寺大觀第十四卷 西大寺全】岩波書店 一九八一
- 宮川富雄・伏見冲敬『西安碑林書道芸術』講談社 一九七九
- 【中華人民共和国 西安古代金石拓本と壁画展図録】毎日新聞社 一九八〇
- 【日本古寺美術全集第九卷 神護寺と洛西・洛北の古寺】集英社 一九八一
- 【日本建築史基礎資料集成四 仏堂一】中央公論美術出版 一九八一
- 敦煌文物研究所編『中国石窟 敦煌莫高窟 第3巻』平凡社 一九八一
- 敦煌文物研究所編『中国石窟 敦煌莫高窟 第4巻』平凡社 一九八二
- 河南省文物研究所編『中国石窟 鞏県石窟寺』平凡社 一九八三
- 松本包夫『正倉院裂と飛鳥天平の染織』紫紅社 一九八四
- 梅原末治『唐鏡大觀』同朋社出版 一九八四
- 陝西省博物館編『陝西古代美術巡礼4 永泰公主椁線刻画』陝西人民美術出版社 一九八五
- 【正倉院の文様】便利堂 一九八五
- 【飛鳥資料館カタログ第8冊 大官大寺―飛鳥最大の寺―】飛鳥資料館 一九八五
- 【国宝大事典四 工芸・考古】講談社 一九八六
- 【平等院大觀 第二巻 彫刻】岩波書店 一九八七
- 天理大学・天理教道友社編集『ひとものこころ 天理大学付属天理参考館 第2期 第5巻』天理教道友社 一九八八
- 天理大学・天理教道友社編集『ひとものこころ 天理大学付属天理参考館 第3期 第3巻』天理教道友社 一九九〇
- 韓偉『海内外唐代金銀器萃編』三秦出版社 一九八九
- 【日本美術全集3 正倉院と上代絵画】講談社 一九九〇
- 【日本美術全集4 東大寺と平城京】講談社 一九九〇
- 【日本美術全集6 平等院と定朝】講談社 一九九〇
- 【法門寺】中国陝西旅游出版社 一九九〇
- 雲岡石窟文物保管所編『中国石窟 雲岡石窟 第2巻』平凡社 一九九〇
- 【龍門石窟裝飾雕刻】上海人民美術出版社 一九九一
- 【法隆寺の至宝 第一五巻 昭和資財帳】小学館 一九九二
- 【院政期の仏像―定朝から運慶へ―】岩波書店 一九九二

- 『敦煌 THE ART OF DUNHUNG』日本放送協会 一九九二
- 林 良一『東洋美術の裝飾文様 植物文様』同朋社出版 一九九二
- 陝西歴史博物館編『唐代墓誌紋飾選編』陝西人民美術出版社 一九九二
- 松原三郎『中国仏教彫刻史論 図版編三 唐・五代・宋 付道教像』吉川弘文館 一九九五
- 『平城京・藤原京出土瓦形式一覽』奈良国立文化財研究所 一九九六
- 山本忠尚『日本の美術三五八 唐草紋』至文堂 一九九六
- 正倉院事務所編『正倉院宝物1 北倉Ⅰ』毎日新聞社 一九九四
- 正倉院事務所編『正倉院宝物2 北倉Ⅱ』毎日新聞社 一九九六
- 正倉院事務所編『正倉院宝物4 中倉Ⅰ』毎日新聞社 一九九四
- 正倉院事務所編『正倉院宝物5 中倉Ⅱ』毎日新聞社 一九九五
- 正倉院事務所編『正倉院宝物6 中倉Ⅲ』毎日新聞社 一九九六
- 正倉院事務所編『正倉院宝物7 南倉Ⅰ』毎日新聞社 一九九五
- 正倉院事務所編『正倉院宝物8 南倉Ⅱ』毎日新聞社 一九九六
- 正倉院事務所編『正倉院宝物9 南倉Ⅲ』毎日新聞社 一九九七
- 正倉院事務所編『正倉院宝物10 南倉Ⅳ』毎日新聞社 一九九七
- 『世界美術大全集 東洋編 第4巻 隋・唐』小学館 一九九七
- 『世界美術大全集 東洋編 第5巻 中央アジア』小学館 一九九九
- 『世界美術大全集 東洋編 第16巻 西アジア』小学館 二〇〇〇
- 敦煌研究院編『敦煌藻井臨品選』陝西旅遊出版社 一九九七
- 張鴻修編著『隋唐石刻藝術』三秦出版社 一九九八
- 文化庁文化財保護部美術工芸課・奈良県教育委員会事務局文化財保存課編『東大寺国宝金堂八角燈籠修理報告書』東大寺 一九九九
- 齋東方『唐代金銀器研究』中国社会科学出版社 一九九九
- 澤田むつ代『上代裂集成—古墳出土の織維製品から法隆寺・正倉院まで』中央公論美術出版 二〇〇一
- 陝西歴史博物館『唐墓壁面珍品・懿德太子墓壁画』文物出版社 二〇〇二
- 敦煌研究院主編『敦煌石窟全集一四 図案卷(下)』商務印書館 二〇〇三
- 敦煌研究院主編『敦煌石窟全集一四 図案卷(上)』商務印書館 二〇〇三

- 『花舞大唐春 何家村遺宝精粹』文物出版社 二〇〇三
- 『陝西歴史博物館珍藏金銀器』陝西人民美術出版社 二〇〇三
- *報告書
- 中国科学院考古研究所編著『中国田野考古報告集 考古學專刊 丁種第十一号 唐長安大明宮』科学出版社 一九九五
- 深井晋司・堀内清治編著『東京大学イラク・イラン遺跡調査団報告書一〇 ターク・イ・プスターンⅠ 図版』東京大学東洋文化研究所 一九六九
- 深井晋司・堀内清治編著『東京大学イラク・イラン遺跡調査団報告書一三 ターク・イ・プスターンⅡ 図版』東京大学東洋文化研究所 一九七二
- 『市立市川考古博物館研究調査報告第6冊 下総国分寺跡 平成元〜5年度発掘調査報告書』市立市川考古博物館 一九九四
- 『法華寺阿彌陀浄土院の調査—第三・二次』『奈良国立文化財研究所年報二〇〇〇・Ⅲ』奈良国立文化財研究所 二〇〇〇
- *展覧会図録
- 『図録 新羅の古瓦壇』北九州市立歴史博物館 一九七五
- 『昭和六十二年 正倉院展目録』奈良国立博物館 一九八七
- 『シルクロード大文明展 シルクロード・仏教伝来の道 図録』奈良国立博物館・(財)なら・シルクロード博協会 一九八八
- 『昭和六十三年 正倉院展目録』奈良国立博物館 一九八八
- 新潟県教育委員会・甘肅省博物館編『天馬かけるシルクロードの秘宝 中国甘肅省文物展』新潟県・中華人民共和国甘肅省 一九九〇
- 『大唐長安展図録』京都文化博物館 一九九四
- 『春日大社名宝展』奈良国立博物館 一九九五
- 『遣唐使が見た中国文化 中国社会科学院考古研究所最新の精華』奈良県立橿原考古学研究所付属博物館 一九九五
- 『砂漠の美術館—永遠なる敦煌展図録』朝日新聞社 一九九六
- 『特別展 法隆寺献納宝物』東京国立博物館 一九九六
- 『奈良国立博物館の名宝—一世紀の軌跡—』奈良国立博物館 一九九七

【中国の正倉院 法門寺地下宮殿の秘宝「唐皇帝からの贈り物」展図録】新潟県立近代美術館・朝日新聞社・博報堂 一九九九

【大仏開眼一二五〇年 東大寺のすべて】目録】奈良国立博物館 二〇〇二

【第五十六回 正倉院展目録】奈良国立博物館 二〇〇四

【中国国宝展図録】朝日新聞社 二〇〇四

*論文

長廣敏雄「唐代の唐草文様」『仏教芸術』八

閻磊「西安出土の唐代金銀器」『文物』一九五九・八

西安市文物管理委员会「西安市東南郊沙坡村出土一批唐代銀器」『文物』一九六四・六

甘肅省文物工作队「甘肅省 川出土の唐代舍利石函」『文物』一九六六・三

水野敬三郎「法隆寺伝法堂各間中尊の光背について」『大和文化研究』一四・六

小田誠太郎「東大寺天平彫刻の文様について」『仏教芸術』一四七

水本咲子「初唐の植物文様について」『美術史』一一八

山本謙治「対葉花文の展開―宝相華文成立の一過程として」『博物館学年報』一八 一九八六

武笠 朗「安楽寿院阿弥陀如来像について」『仏教芸術』一六七

薄小登「敦煌莫高窟六世紀末至九世紀中葉的裝飾圖案」『北京大学中国中古史研究中心編 敦煌吐魯番文獻研究論集』北京大学出版社 一九九〇

田中敏雄「聖德太子及び天台高僧像（一乗寺）」『週間朝日百科 日本の国宝三一 兵庫／太山

寺・一乗寺・神戸市立博物館・白鶴美術館・黒川古文化研究所』朝日新聞社 一九九七

松本伸之「唐代金銀器の諸相―一九五〇年代から一九九九年までの発掘資料をめぐって―」

『東京国立博物館紀要』三五

山内和也「イラン高原の建築裝飾―紀元前一千年紀からサーサーン朝ペルシア時代―」『砂漠

にもえたつ色彩―中近東五〇〇〇年のタイトル・デザイン―』岡山市立オリエント美術館 二〇

〇一

甘肅省博物館「敦煌佛爺廟唐代模印塚墓」『文物』二〇〇二・一

瀬山里志「天平彫刻団花文小考」『サントリー美術館論集』六号

西安市文物保護考古所「西安西北政法學院南校区三四号唐墓發掘簡報」『文物』二〇〇二・一

二

盧兆荫・古方「略論唐代 金銀器的玉石器皿」『文物』二〇〇四・二